

共同研究 海域・海村の景観史に関する総合的研究

期間：2015年～

[所員] 安室 知 内田青蔵 大川 啓 小熊 誠 昆 政明 佐野賢治 後田多敦
須崎文代 泉水英計 高城 玲 田上 繁 田島佳也 平井 誠 廣田律子
前田禎彦 安田常雄

[客員研究員] 横山貴史 橋村 修

[研究協力者] 石井和帆（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）

2017年度 活動報告

安室 知

[研究目的]

本研究所はその発足の早い段階から海域・海民史の研究に取り組み、これまでも能登半島や瀬戸内海の島嶼部といった地域で多くの研究蓄積をなしてきた。また近年は、国際常民文化研究機構のもと「海域・海民史の総合的研究」として3つの共同研究を企画・実施している。本共同研究はそうした研究蓄積を継承し常民研全体として発展させようとするものである。

海は水産物だけでなくさまざまな資源を生み出す。そして、その開発・利用に当たっては、人・物・情報の行き来を促し、そうした営みを通して社会知や民俗知が膨大に集積される空間となっている。反面、負の記憶として、海域の利用をめぐる個人や村のレベルから国際的な問題までさまざまな対立や紛争を生んできたし、また海という大自然とたえず対峙する海村では大きな災害や事故が歴史的に繰り返されてきた。そうした海域・海村の歴史民俗文化について、絵図として残された景観を手がかりに、本研究所の人的資源を活用し学際的に研究することが本共同研究の主たる目的となる。

[2017年度活動]

1. 研究会

2017年度第1回（通算、第6回）の「海域・海村の景観史に関する総合的研究」研究会（通称、漁場図研究会）は、2018年2月21日（水）に常民研において開催された。安室知（所員）、窪田涼子、越智信也（以上、職員）、竹村紫苑（中央水産研究所）の4名が発表者となり、常民研・中央水産研のほか、他の研究機関からも含め、計30名ほどの参加者を得た。今回の研究会は、漁場図に関して中央水産研究所と日本常民文化研究所との研究協力体制を模索する意味があり、常民研のみならず中央水産研究所からも多数の研究会参加があった。

研究会の前段では、安室が常民研において漁場図を中心とした共同研究「海域・海村の景観史に関する総合的研究」が構想された経緯とこれまでの進捗状況について説明し、また越智と窪田は常民研の約2,000点に及ぶ漁場図について、それが作成され常民研に所蔵されるようになった経緯およびその総体の概要について解説した。それを受ける形で、研究会の後段では、景観生態学を専門とする竹村紫苑氏から、漁場図研究におけるGIS（地理情報システム）利用の可能性について、い



写真1 「潜水具装着図」千葉県 瀬戸漁業協同組合文書（常民研所蔵）

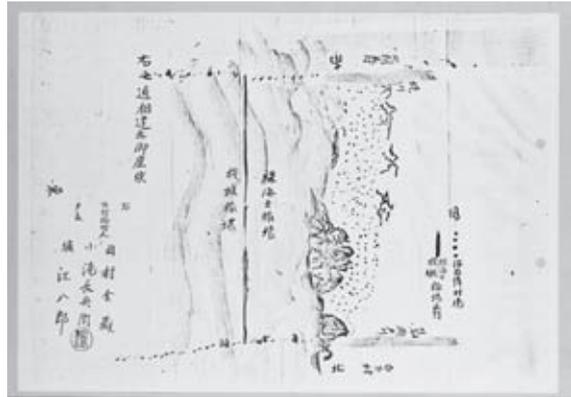


写真2 「潜水漁操業区域図」千葉県 瀬戸漁業協同組合文書（常民研所蔵）



写真3 漁場図研究会風景（2018年2月）

くつかの事例を参照しながら提案がなされた。

さらに、聴講者も含めた参加者全員による質疑応答においては、まず水産経済学を専門とする中央水産研究所の松浦勉氏に漁業権の歴史的推移について解説をいただき、その上で前段も含めた発表全体に関して忌憚のない意見交換がおこなわれた。そして最後に、今後、漁場図研究においては中央水産研究所と日本常民文化研究所との協力体制をさらに強化してゆくことが確認された。

2. 共同調査

本年度の共同調査は、宮城県気仙沼市大島において、2018年3月13日（火）から3月15日（木）までの2泊3日でおこなわれた。参加者は、安室知、大川啓、小熊誠（以上、所員）、窪田涼子



写真 4 区画漁場図（大島漁協文庫所蔵）

（職員）、石井和帆、兪鳴奇（以上、歴史民俗資料学研究科後期課程院生）、小野寺佑紀（前期課程院生）の7名であった。

調査の一環として、大島漁協文庫の維持管理のあり方、およびその活用方法について、大島漁協文庫の会会長の菊田榮四郎氏と話し合いをおこなった。また、大島の漁業史について、国際常民文化研究機構の共同研究「宮城県気仙沼大島における遠洋漁業の歴史の変遷に関する研究—震災救出資料を中心として—」で代表をつとめる千葉勝衛氏からお話をうかがった。

さらに、前年度の共同調査からの引き続きとして、漁協文庫所蔵文書の中から漁場図を探しだし資料化する作業をおこなった。今回の調査では、主に海苔養殖漁業の申請時に描かれた漁場図など約800点を簡易撮影した。これらの漁場図は昭和50年代のものが主であったが、なかには明治期に記録された漁場図も発見された。

3. 個人調査

(1) 唐桑半島・気仙沼大島民俗調査（佐野賢治、2017.9.29-10.2）

調査は、佐野賢治（所員）に小野寺佑紀（前期課程院生）が同行し、そのほか佐野ゼミの有志が

参加して、2017年9月29日（金）から10月2日（月）におこなわれた。なお、期間中には、第3回「漁業史文庫を語る会」が開催され、佐野が講演をおこなっている。

本調査は、「森は海の恋人」で知られる気仙沼湾へ注ぐ大川の水源、室根山も含め大島漁民の景観認識の背景を山と海の相関関係でとらえるための現地巡見と予備調査を目的とするものである。9月29日は唐桑半島の巡見。9月30日の午前中は大島神社、薬師堂（現・久須師神社、旧修験東光院）を参観し、その後は外畑・小山家で聞き書きをおこなった。10月1日の午前中は2名の古老からカキ養殖について聞き書きをし、午後は大島御崎、西光寺、長命寺などを訪問し墓調査をおこなった。そして、最終日となる10月2日は、志津川、柳津、石巻を經由して東日本大震災の復興の現状を実見し、横山不動尊、柳津虚空蔵尊でウンナン神について聞き書きをおこなった。



写真5 唐桑半島御崎神社近くの鯨塚（撮影／佐野賢治氏）

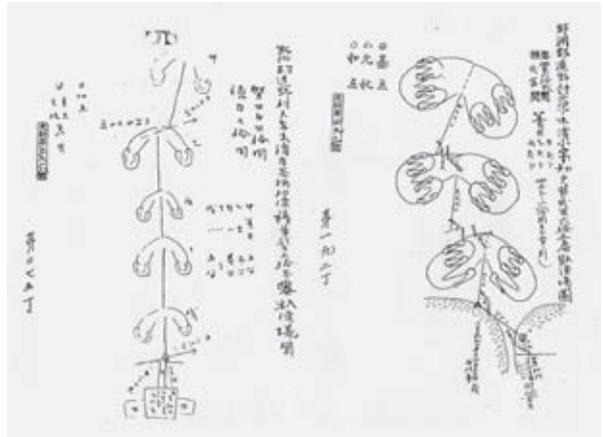


写真6 明治38年鮎漁場申請図（滋賀県県政資料室所蔵）
出典：滋賀県教育委員会編『内湖と河川の漁法—琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書Ⅲ—』1981年

（2）琵琶湖調査（安室知、2018.3.7-9）

安室知（所員）は、滋賀県県政史料室に所蔵されている1,300点あまりの鮎漁場図（明治時代のもの）について閲覧するとともに、その簡易撮影をおこなった。エリは定置型の迷入陥奔漁法で、その最大の特徴は1,300mにも及ぶ規模と複雑に入り組んだ迷路状の構造にある。規模としては、日本はもとより、世界最大級といってよい。また、構造で言っても同系統の迷入陥奔漁法である定置網に比べてもはるかに複雑である。

エリは現在でも琵琶湖に存在するが、時代を遡るほど、例えばテンピン・ウチマタゲ・ズットイキなど多様な形態を有する。また、小河川の河口部に仕掛けられる小規模なものから、琵琶湖南湖のような広く浅い湖面に建てられる巨大なものまで、多様な規模のものが存在したことが、今回の調査ではあらためて明らかとなった。

■活動データ

2017年度の活動

- 唐桑半島・気仙沼大島民俗調査および第3回「漁業史文庫を語る会」の講演 2017年9月28日～10月2日
浅根コミュニティセンター 佐野賢治、小野寺佑紀（院生）
- 第6回研究会「漁場図研究が目指すもの」安室知、「常民研所蔵の漁場図とは何か」越智信也・窪田涼子、「GISの強みと弱み—GISによる歴史史料（漁場図）研究の可能性」竹村紫苑（中央水産研究所） 2018年2月21日
- 琵琶湖（鮎漁場図）調査 2018年3月7日～9日 滋賀県県政史料室 安室知
- 共同調査（漁場図資料・民俗） 2018年3月13日～15日
気仙沼大島漁協文庫他 安室知・大川啓・小熊誠・窪田涼子・石井和帆、小野寺佑紀・兪鳴奇（院生）